

## 1. 鶴ヶ城と城下町の営みにみる歴史的風致

### (1) はじめに

鶴ヶ城（若松城）は古くから要衝として栄え、蘆名氏による長い統治ののち、奥州の要として蒲生氏郷、上杉景勝、加藤嘉明、保科正之など名だたる大名が統治してきました。幕末の戊辰戦争では、大規模な市街地戦が繰り広げられ、城下は戦火によって郭内の侍屋敷の大半と郭外町屋の3分の1が焼けたとされ、その後約1ヶ月間に及ぶ籠城戦の未降伏・開城し、白虎隊のほか332名の女性や子供の自害など、大きな悲劇を生んだ戦いは終焉を迎えました。

昭和3年(1928)の秩父宮雍仁親王殿下と松平節子姫のご成婚は、戊辰戦争により敗れた会津藩の復権が叶った象徴的な出来事となり、その際の様々な祝賀行事が会津まつりの始まりとされます。鶴ヶ城（若松城）・市役所を中心とした市内のまちなかを、当時の格好に扮した人々が、藩公行列として練り歩き、巡行中には往時の姿に倣った演舞やお囃子などが披露され、要所で華を添えています。

### ①黒川城の歴史

会津において最初に勢力を伸ばしたのは相模国三浦氏一族の蘆名氏でした。蘆名氏一族が会津地方に関わりをもつようになるのは、文治5年(1189)鎌倉政権が奥州藤原氏を滅ぼした奥州合戦の功績により、蘆名氏の祖である佐原義連が会津を拝領したことによるとされる一方、鎌倉時代中期以降、北条氏の所領が会津地方に形成されたことにもよるとされています。

蘆名氏が城館を構えた地は、会津盆地の東南部に位置し東南側の山々から流れる湯川が形成した扇状地に立地し、湯川の旧称である羽黒川または黒川に由来してこの一帯の地名は黒川と呼ばれました。

城は黒川城または小高木城と呼ばれ、至徳元年(1384)蘆名7代の直盛が現在の地に東黒川館または小高木の館といわれる館を築いたのが始まりとされ、小高木は、のちに小田垣と改められ現在の鶴ヶ城（若松城）の東南にその名を残しています。

蘆名氏は天正17年(1589)磐梯山麓の摺上原（現在の磐梯町と猪苗代町の境一帯）の戦いで伊達政宗に敗れるまで20代400年にわたり会津一帯を支配しました。

### ②黒川城から鶴ヶ城（若松城）へ

天正18年(1590)に蒲生氏郷が入城し、文禄元年(1592)に城の大改修に取り掛かりました。天守閣は7層とも言われています。

『正保城絵図』（正保元年(1644)）に「陸奥之内会津城絵図」とあるように、幕府による公称は「会津城」でしたが、『会津鑑』（寛永元年(1789)）が「若松城」と記すように会津藩では「若松城」と称し、「鶴ヶ城」とも呼ばれたことから現在では一般に「鶴ヶ城」と呼ばれています。



正保城絵図「陸奥之内会津城絵図」

城を中心として東西方向に約 2.0km、南北方向に約 1.3km の範囲を外濠と土塁で囲み、惣構を成しています。その内側は郭内と呼ばれ、上級武士の屋敷や藩の施設などが置かれ、外側の郭外には町屋敷、寺屋敷、足軽屋敷などが配置されました。

郭内は基本的に「丁」と呼ばれる東西の道路と、「通」と呼ばれる南北の幹線道路により区画された短冊形の長方形の地割で構成され、侍屋敷が配置されました。

慶長 3 年（1598）に城主となった上杉景勝の時代を経て、蒲生氏郷の子秀行が再び城主となった後、慶長 16 年（1611）会津大地震が発生し、鶴ヶ城（若松城）も天守閣や石垣、塀、櫓に甚大な被害を受けたとされます。

城郭については、寛永 4 年（1627）に加藤嘉明が入城し、その子明成の時代（寛永 16 年（1639）頃）、大掛かりな改修が行われました。五層の天守閣を築き、本丸の

西・北の馬出を広くして東西 41 間・南北 69 間の西出丸、東西 67 間・南北 33 間の北出丸に改修されました。これにより、それまで東に開いていた大手門は、北出丸に開くこととなりました。

その後、寛永 20 年（1643）に保科正之が入り、明治元年の松平容保まで、徳川家への忠誠を尽くした会津藩の統治は 225 年間続きました。

戊辰戦争では、慶応 4 年（1868）8 月 23 日から約 1 ヶ月にわたる籠城戦に耐え、西軍の進入を防いだものの、城郭の東南東方向（直線距離約 1.5 km）に位置する小田山や、郭内に設けられた砲台からの総攻撃により郭内の武家屋敷の大半が焼失しました。天守閣や櫓など多くの建造物が損壊しましたが、城全体が倒壊、焼失することなく、堅牢さを証明しつつ開城することとなりました。



蒲生氏郷が整備した町割（若松町割図）

### ③戊辰戦争後の鶴ヶ城（若松城）

明治元年（1868）の開城後、鶴ヶ城（若松城）は兵部省（陸軍省）の管轄となり仙台鎮台の管理となりました。明治2年（1869）に若松県が置かれ、初め県庁を大町の融通寺に仮設しましたが、同年、城内の本丸に移され、城地の管理は若松県に移管され、若松県庁に使用された大書院や小書院を除き少しずつ取り壊しが開始されました。

明治3年（1870）に本丸内にあった御座之間が日新町の長命寺に移築され（その後火災により焼失）、本丸内にあった御三階は、七日町の阿弥陀寺に移築され現在に至っています。明治4年（1871）以降、外郭の濠が土塁を崩して埋め立てられ、濠に接する町に対し、希望する者に田畑をつくることを条件として無料で払い下げられ、その後宅地化が進みました。

明治6年（1873）に若松県庁が他に移されたため、翌7年（1874）に陸軍省より全城の破却が告示されましたが、取壊しを惜しむ市民の請願により20日間に及ぶ博覧会が開かれ、多くの町民が初めて城内を観覧したのち上屋はすべて取り壊されました。

明治23年（1890）に、七十七銀行の頭取であった旧藩士遠藤敬止が中心となり資金を調達し、城地全域の払い下げを受けました。城地の払下げは、鶴ヶ城（若松城）が荒廃していく姿を目の当たりにし、「何とかその姿を後世に伝えていくためには城跡を町びとのものにし、官有地である城跡の払い下げを受けたうえで、その土地を旧藩主家に差し上げ、町びと皆で守っていく」との考えによるものでした。翌年、明治24年（1891）に松平家に所有権移転登記がなされ、明治36年（1903）には、一部を若松市が松平家より借り受け、市の公園としました。明治41年（1908）には、三ノ丸の土塁の大部分を撤去し、濠が埋め立てられ、歩兵第65連隊の練兵場の一部と道路用地となりました。その土地は松平家から陸軍省と内務省に所有権が移転され、この頃から残された各濠は養鯉場として使用されました。

練兵場となった三ノ丸の一部を除く「元城地」は、大正5年（1916）若松市が松平家より譲り受ける契約を締結し、大正6年（1917）、東京帝国大学農科大学教授で、後に「公園の父」と呼ばれることとなる林学者の本多静六に依頼し、「若松公園設計方針」が出され、本丸、各出丸の植栽、園路の設定、各種公園施設の設置、石垣の撤去等の公園整備計画が示され、本丸裏門や西出丸の内讃岐門、二ノ丸東門の石垣が撤去されました。昭和2年（1927）正式に所有権が若松市に移転され、「公園地」に地目変更後、昭和9年（1934）国の史跡の指定を受けました。



砲撃を受けた鶴ヶ城（若松城）（明治初期）



天守閣解体後の鶴ヶ城（若松城）（明治末期）

#### ④第二次世界大戦後の鶴ヶ城（若松城）

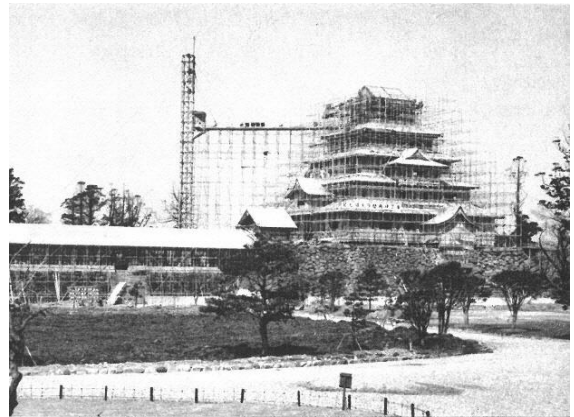
第二次世界大戦中、鶴ヶ城（若松城）は食料増産のため本丸や西出丸では芋畑等として掘り起こされた記録がみられます。昭和 25 年(1950)に第二次世界大戦後の財政非常事態の解決策として、新制中学校4校の設置費用を補うこと等を目的に本丸に県営の競輪場が設置されました。

昭和 32 年(1957)の競輪場の移転に伴い、本丸は芝張り、松の植栽、園路整備等が行われ、昭和 35 年(1960)まで整備が続きました。

#### ⑤天守閣の再建

昭和 32 年(1957)の戊辰戦役 90 年祭の式典において、天守閣再建の機運が高まり、幾多の議論を経て、外観を復元し、内部を郷土博物館として再建することとなり、天守閣は鉄筋コンクリート造、走り長屋は鉄骨造、鉄門は木造により昭和 39 年(1964)に着工し、昭和 40 年(1965)落成しました。再建にあたっては、明治初期の取壊し前の古写真から設計を行い、写真資料のない走り長屋西面と鉄門北面は推定によることとなりました。

発掘調査により、燻瓦である黒瓦と、表面に釉薬を施し赤く発色した赤瓦が出土していることから、当初使用されていた黒瓦が、冬期の寒さにより凍み割れてしまうことで変更されたと考えられています。慶安元年(1648)頃以降、赤瓦に葺替えられてきたことが記録され、幕末期には赤瓦で葺かれていたと考えられることから、平成 22 年(2010)、往時の天守閣再現事業によりそれまでの黒瓦葺の屋根から赤瓦に葺直されました。



再建中の鶴ヶ城（若松城）



再建当初の黒瓦の鶴ヶ城（若松城）

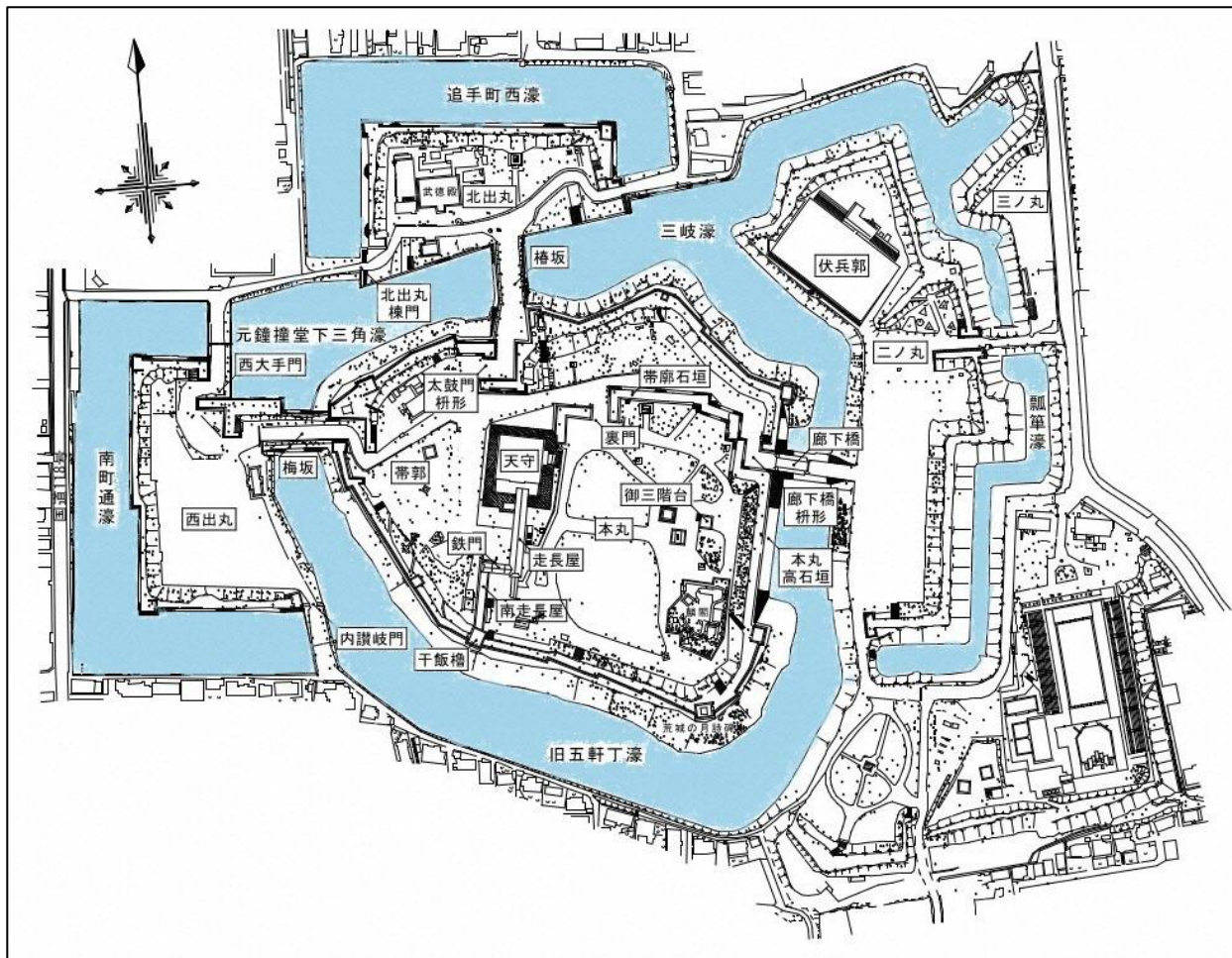


赤瓦に葺直された  
鶴ヶ城（若松城）

## (2) 建造物等

### ① 鶴ヶ城（若松城跡（国指定の史跡））

国指定の名称は若松城ですが、市民からは「鶴ヶ城」の愛称で呼ばれています。



鶴ヶ城（若松城）内図

#### (ア) 本丸

城の構造は、本丸から東に二ノ丸、三ノ丸を構えた梯郭式<sup>ていかくしき</sup>の平山城で、本丸の中央やや北西側に天守閣を築き、また、城主の屋形及び役所が置かれた本丸、二ノ丸、三ノ丸を併せて内郭とし、その外側に外郭を築きました。

石垣の大部分は市の東方、東山地区の天寧・慶山<sup>ていせい・けいざん</sup>周辺で産出される「慶山石」と呼ばれる熔結凝灰岩<sup>ようけつねいがいがん</sup>が用いられており、現存する石垣が天守台と、本丸北東隅の一部が蒲生時代である以外は、いずれも加藤時代以降のものと考えられています。本丸は外周に土塁、濠<sup>さう</sup>を設け、出丸により本丸を固め、16の虎口（郭門）を配置した総構<sup>そうこう</sup>のつくりです。



東南側上空から見た鶴ヶ城（若松城）

天守閣を支える天守台の内部には、山塩を保管する塩蔵しおくらと呼ばれる穴蔵が設けられ、天守が北西側に寄せて建られているため天守台の南側に空間を有します。天守は5層5階の層塔型です。

外観は総塗籠そうぬりごめであり、最上階に縁えんが巡らされていますが、外観に装飾は少なく、一重目の天守入口と二重目の南北面に切妻形張出きりつまがたはりだし、三重目の東西面に入母屋形張出いりもやがたはりだしの計5基の張出が設けられています。

現在、内部は郷土博物館となっており、最上階からは会津盆地が一望できます。

#### (イ) 帯郭おびくわ

帯郭くわがねもんは鉄門・走長屋により、門内が本丸、門外が帯郭に区画されます。

本丸には2つの門が存在していましたが、表門は門の扉や柱が鉄板で覆われていたことから鉄門と呼ばれました。外観の特長は、天守や走長屋が総塗籠であるのに対し、下見板張したみいたばりであり、さらに窓は突上戸つきあげどが用いられ古い形態が見られます。

北出丸に通じる門は、径5尺8寸の櫓でつくられた太鼓があったことから太鼓門と呼ばれ、鉄門と同様に下見板張であったことが知られています。



鶴ヶ城（若松城）帯郭を区画する鉄門

#### (ウ) 石垣

天守台の石垣は蒲生時代の特徴を示す野面積みのらつづみで、自然石を横に寝かせ、ゆるやかな勾配で積み上げられています。年代ごとに積み方が異なり、天守台の出隅部ですみぶを補強した算木積さんぎづみは未発達です。

石垣の高さは地表面から11mありますが、発掘調査により、蒲生時代の地表面は現地表面の約1m下であったことが分かっています。走り長屋の石垣は寛永期（1624～1644）の技法で積まれており、天守台の野面積みとの違いが明確です。天守に続く走長屋は、往時は武具等の保管庫であったと考えられます。近年の発掘調査により、この部分は枳形ますがたであったことが分かっています。

各郭と帯郭は3か所の門により結ばれていましたが、太鼓門は北出丸から通じる大手筋の重要な門であり、枳形が設けられ、枳形を構成する石垣の側面には、小面積で多くの人員が動けるよう相坂あいざかと呼ばれる逆ハの字形の階段が設けられました。枳形の正面及び両側の石垣には、大型の石が数多く用いられ大手門としての威容を



鶴ヶ城（若松城）石垣（廊下橋枳形）

誇ると同時に、鏡石と呼ばれる巨石が配置され、悪気をはらう呪いでもあったとされています。

鶴ヶ城（若松城）では、本丸、帯郭、北出丸、西出丸などに石垣が数多く存在し、その多くは寛永 16 年（1639）に加藤明成が築いたものです。本丸や帯郭の外周は、土塁の上に石垣が築かれた鉢巻石垣がめぐっていますが、この本丸東側の二ノ丸に面する部分の廊下橋付近から茶壺櫓にかけての幅 120m ほどは、高さ 20m を超える城内でもっとも高い石垣があり、扇の勾配または宮勾配と呼ばれる曲線的な形状を保ち、大きさを合わせた石を横に並べることで横目地が通る布積みにより築かれています。天守から裏門、さらに廊下橋門に続く走長屋の石垣は、本丸と北帯郭を区画しています。走長屋でも、鉄門側の天守南側の石垣は寛永期に築かれたものですが、裏門の石垣は本丸側と帯郭側の一部に野面積みの古い石垣が天守台とともに残っています。



鶴ヶ城（若松城）高石垣

城内に入る最初の門である大手門も、寛永 16 年（1639）に加藤明成が改修したものです。一般的な柵形の門は、一ノ門に櫓門、二ノ門に高麗門が付く場合が多いとされますが、鶴ヶ城（若松城）では二ノ門ではなく大腰掛という階段状の雁木が付きます。

### (工) 茶室麟閣（福島県指定重要文化財（建造物））

天正 19 年（1591）、千利休が切腹を命ぜられた際、会津藩主蒲生氏郷は、茶道の恩師利休の養子である少庵を会津にかくまいながら千家復興を願い出て許され、現代の茶道の隆盛に大きな役割を果たすこととなりました。

茶室麟閣は、三畳台目に 2 本の襖を隔てて相伴席を付し、水屋及び六畳敷の鎖の間が付属する厚い茅葺屋根で覆われた茶室で、少庵が茶道振興のため会津滞在中に建られたとされています。



移築復元前の茶室麟閣

その後茶室は、戊辰戦争の戦禍を逃れ、明治 7 年（1874）に鶴ヶ城（若松城）解体の際、江戸初期より薬種商を営み、石州流怡溪派の茶人であった森川善兵衛氏が政府に願い出て自宅に移築し、保存されてきました。

昭和 30 年（1955）9 月発行の『會津史談会誌』第 30 号の国学院大学教授文学博士の桑田忠親によると、茶室は 360 年位前のものである、との記述が見られます。

会津若松市政 90 周年を記念し、茶室は路地庭整備や周辺整備を含めて平成 2 年（1990）に鶴ヶ城（若松城）内の元の場所へ移築復元されました。現在は一般公開され、茶会等でも利用されています。



(オ) 天文台跡（会津若松市指定文化財（記念物（史跡）））

五代藩主松平容頌の時代に開かれた、藩校日新館の敷地の西北側に所在していたもので、藩校日新館は戊辰戦争で焼失しましたが、天文台跡は今に残る唯一の遺構です。『新編会津風土記』（享和3年（1803）～文化6年（1809））の日新館図にも記載があり、当時の様子を伺い知ることができます。暦学家や天文師範などが集まって明年の気候等を編み、『会津暦』（現存する最古の暦は寛永11年（1634）のもの）等の発行に関する検討がなされた、とされます。

令和元年（2019）には天文学的に貴重なものとして、日本天文学会により日本天文遺産に認定されました。



『新編会津風土記巻之十四』に記載されている天文台



天文台跡

②鶴ヶ城（若松城）郭外の建造物等

(ア) 会津松平氏庭園（国指定の名勝）

旧会津藩主松平氏の別荘で、薬草の栽培もされており、「御薬園」の名で親しまれています。庭園の築造年月は明らかではありませんが、江戸時代中期の作庭手法による大名庭園の形式による山水庭で、中央に池を広くとり、中島をおき、茶亭の楽寿亭を設けています。池の右奥に男滝、左に女滝があります。後方に低い築山を設けて東山連峰の風景をとり入れています。



会津松平氏庭園（御薬園）

(イ) 御茶屋御殿（名勝構成要素）

元禄9年（1696）の建築とされ、上ノ間、次ノ間、扣ノ間からなり、質素を旨とする藩主の意図から規模狭小、古木素朴を用いており、歴代藩主の別荘として使われていました。江戸期に建築された部分は木造平家建茅葺、明治期に増築された部分は木造二階建片側寄棟金属板葺となっています。

戊辰戦争のときには新政府軍の療養所となり、戊辰戦争後は増築が施され、9代藩主であった容保の住まいとして使用されました。



御茶屋御殿

(ウ) 楽寿亭 (名勝構成要素)

元禄9年(1669)に御薬園の庭園内に造営されたとされる茶室で、木造平家建、寄棟、茅葺、桁行2間、張間2間、外壁は真壁造り鏡押え、案内板によると藩主や藩の重役たちが、納涼・茶席・密議などのために用いたとされます。「楽寿亭」の名は、3代藩主正容によって命名されました。北側の濡縁には、戊辰戦争の際の刀傷が今も残されています。



楽寿亭

(エ) 重陽閣

昭和3年(1928)秩父宮妃勢津子殿下が御結婚の報告のため帰郷する事になり急遽、東山温泉「新瀧」に別館として建られたものです。その後解体される予定でしたが、勢津子妃からの存続の声もあり、昭和48年(1973)に松平家ゆかりの御薬園に建物が移築され、登記簿に昭和48年(1973)の記載があります。



重陽閣

当初木造三階建でしたが、2階と3階のみを移築し、木造二階建、入母屋、棧瓦葺、桁行9間半、梁間4間、外壁は真壁造り白漆喰仕上げ、内部は勢津子妃殿下が英国で

生まれたことにちなみ英国調の意匠が採用されています。

(オ) 会津藩主松平家墓所 (国指定の史跡)

山一帯が松平家の墓所で通称「院内御廟」と呼ばれており、亀型の石の上にいる碑石、位階の表石、霊をまつる鎮石の三体形の巨大な墓碑が、うっそうとした森のなかに点在しています。2代藩主保科正経は仏式で、それ以降9代藩主松平容保までが神式により、祀られています。

初代藩主の保科正之は土津神社(猪苗代町)に祀られています。



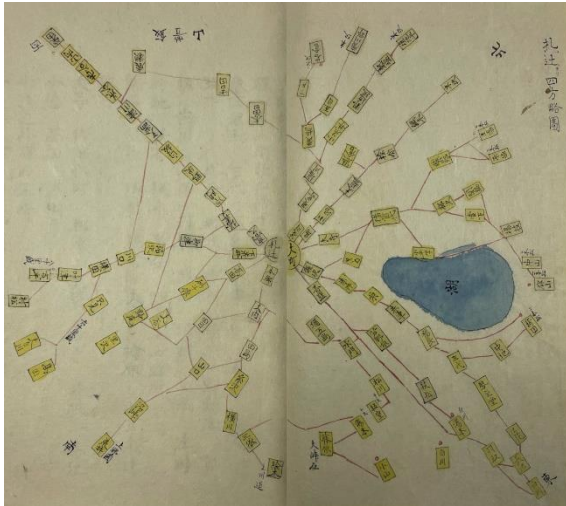
会津松平家墓所入口



亀型の石にのる碑石

### ③会津五街道をはじめとする古くからの通りに残る歴史的建造物

会津藩は幕府の街道整備の命に伴い、慶安2年(1649)に、領内を通る5つの街道と25の小道調査を行い、城下の大町札之辻を起点とする会津五街道を報告しています。会津藩政の後期に編さんされた『会津鑑』(寛政元年(1789))「札ノ辻ヨリ四方略図」では、会津藩領内の交通網が描かれ、領内を通る道のうち、白河街道、下野街道、二本松街道、米沢街道、越後街道は、会津藩と他領を連結する主要幹線路であったことから「本道五筋」と呼ばれました。

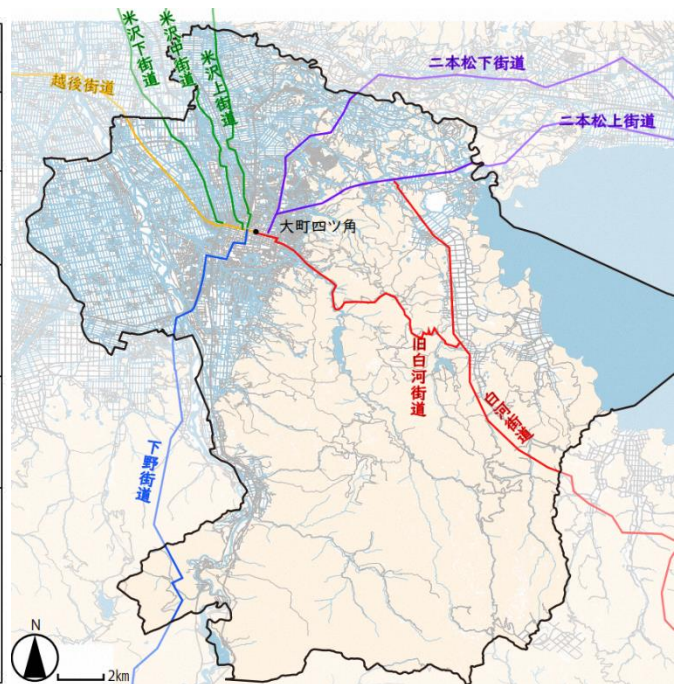


札ノ辻ヨリ四方略図『会津鑑十二巻』



石畳が残る白河街道(滝沢旧道)

街道名	鶴ヶ城(若松城)からの行先	距離		概要
		距離	距離	
1 白河街道	白河城下(福島県内)	17里11町(約69km)		会津歴代藩主の参勤交代時の往復と江戸廻米路としての幹線
2 下野街道	下野国今市(栃木県)	32里(約128km)		南山、今市、日光、会津西街道など多くの別名があり、白河街道と並ぶ江戸廻米路
3 二本松街道	二本松城下(福島県内)	15里(約60km)		主要駅所に大寺(現在の磐梯町)と猪苗代があり、慧日寺、土津神社などの参詣道であると同時に物流供給路で上下2本の街道あり
4 米沢街道	米沢城下(山形県)	14里(約56km)		上・中・下街道の3本の街道があり、慶長13年(1608)開発された下街道を本街道とする、米沢、越後への流通路
5 越後街道	越後国新発田(新潟県)	23里(約92km)		白河街道と新発田で越後金山街道に連結する官道として重要視された街道であり、坂下、野沢、津川では六斎市を開催、津川は阿賀川舟運の物流拠点として代官所、舟番所、蠟・塩・廻米蔵、交易役場を設置



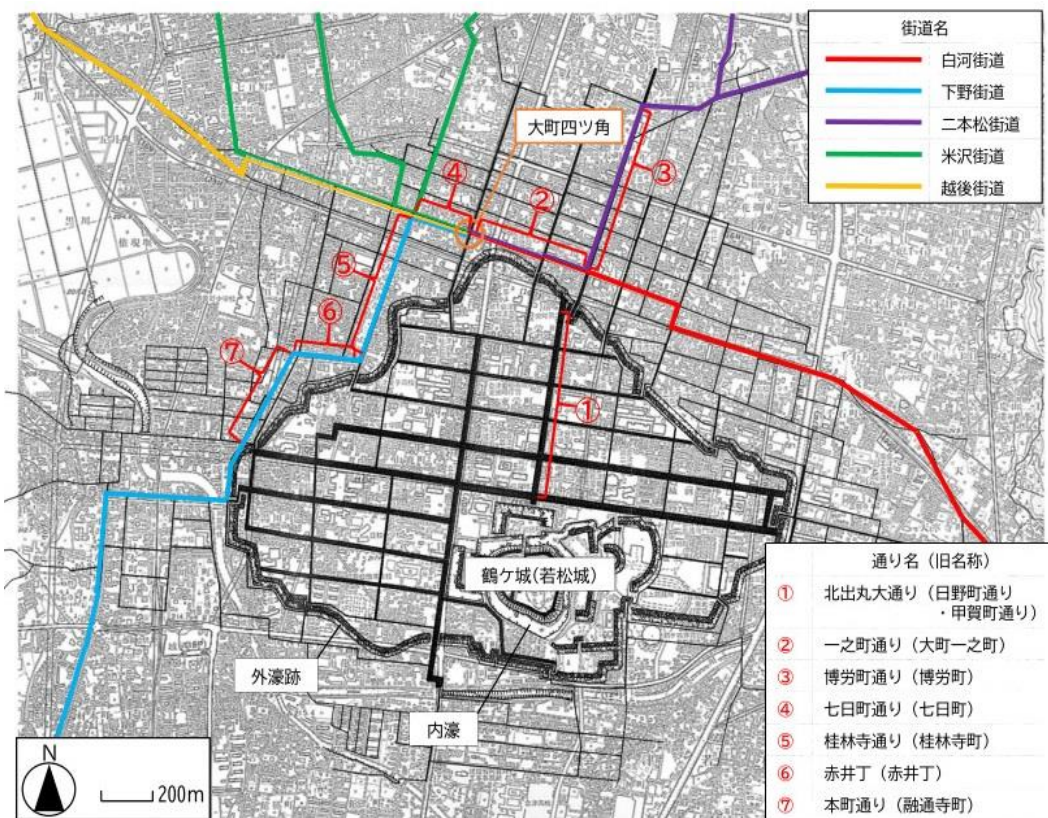
会津五街道

越後街道は、幕府の金山奉行の役人や佐渡送りの人足が通行し、金荷物が輸送される重要な街道で、白河街道から江戸に通じていました。また会津藩は参勤交代による宿駅制度や領国境の口留番所を整備し、街道の改修も進めました。

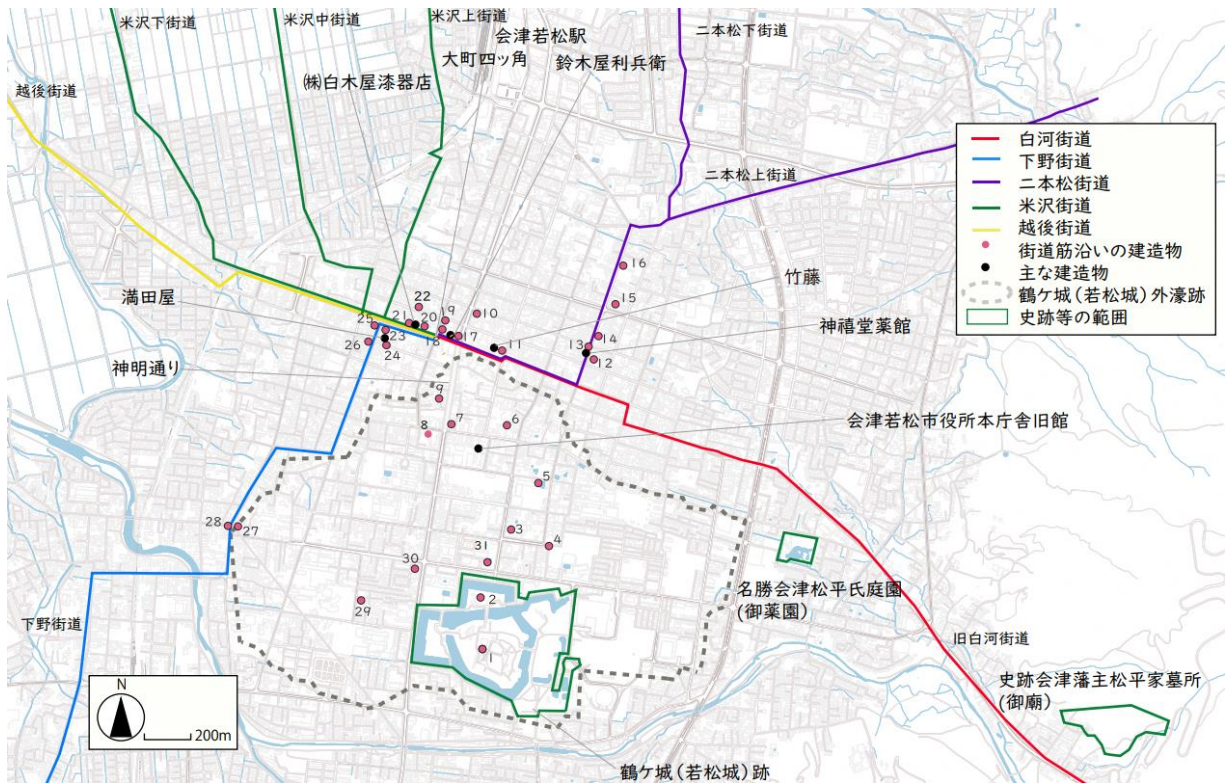


江戸末期に描かれた会津藩主参勤交代行列図

現在の大町四ツ角は鶴ヶ城（若松城）外濠跡の北側に位置し、放射状に広がる複数の街道の起点でした。碁盤の目状に整備された古くからの通りには名前が付けられ現在に至っています。五街道をはじめとする古くからの通りは、現在も主要な道路として使用され、沿線には歴史的建造物が数多く残されています。



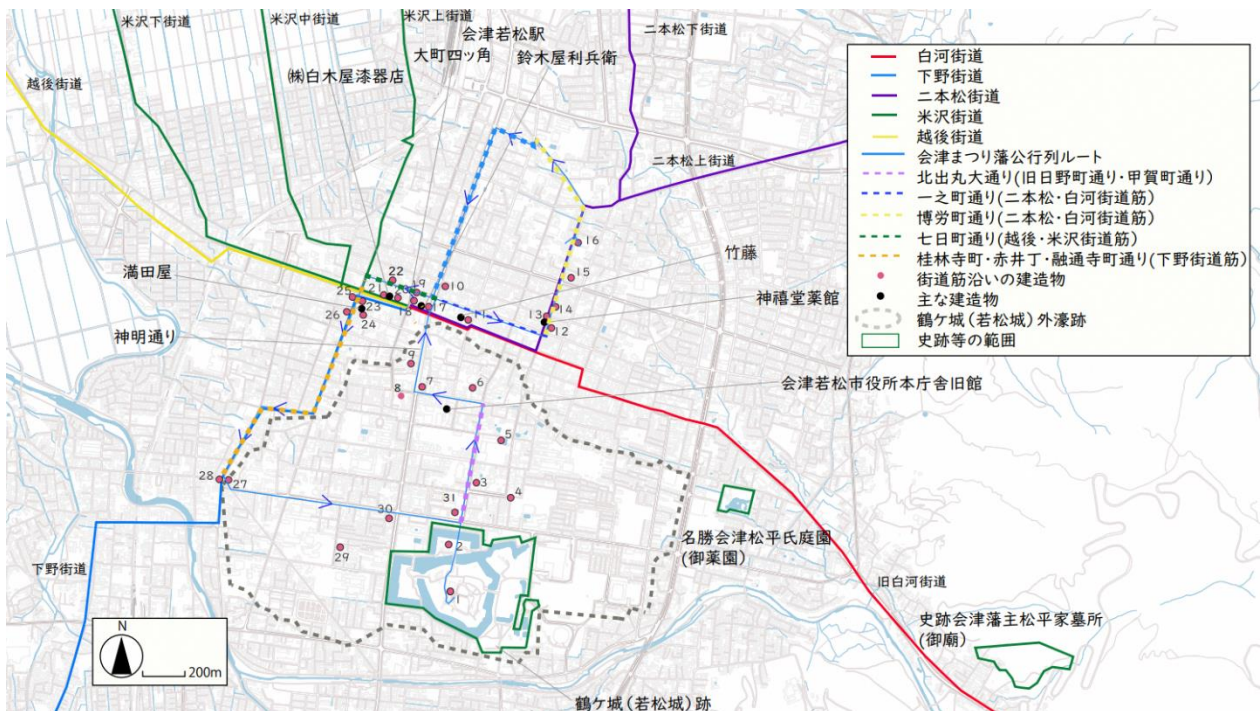
現在の都市計画図と旧城下図の重複図



会津五街道沿いの歴史的建造物

後述する会津まつりの行列では、以下に示す通りや街道筋を練り歩き、行列と演舞が一体となって歴史的な雰囲気醸し出しています。

各通りにある歴史的建造物などの店先には、まつりの開催を知らせるポスターが掲示され、各小学校の校庭から漏れ聞こえる鼓笛隊パレードの練習音も相まって、まつり開催までの約1か月間にわたり市民のまつりに対する高揚感を感じさせています。



会津まつりの経路と街道筋

(ア) 北出丸大通り（旧名称：旧日野町通り・甲賀町通り）〔郭内〕

蒲生氏郷が町割りを行った際、郷里の日野より職人や商人を呼んで住ませたことが始まりで、当初、日野町と称したことで日野町通り、また、甲賀町口郭門を抜けると甲賀町であることから、甲賀町通りとも呼ばれていました。

通りの南端東門には家老の西郷頼母邸があったことから、現在、「戊辰殉難西郷邸址」の碑が建られ、西郷邸の西（道路の向かい側）には内藤邸址があり、大名庭園である白露庭が現在も残されています。

西郷邸と内藤邸の間の道路は、会津戦争降伏調印の式場となった場所です。通り付近（五之町）には、会津若松市役所本庁舎旧館などの歴史的建造物があります。

・会津若松市役所本庁舎旧館

『日本近代建築総覧』（（日本建築学会編）昭和 55 年(1980)）によると、昭和 12 年(1937)に建設され、現在も建設当時の「近世復興式の豪壮な建築様式」とされた外観で、古代ローマのコリント式オーダーをデザインに取り入れています。本庁舎旧館は、建物が築 80 年以上を経ていること、外壁において当初の状態がおおむね維持され、歴史的な価値があり、立地や建築の特徴から建築物そのものの価値のほか市民や地域のシンボルとしての価値を有していることから、現状の庁舎を保存することが決定しています。



市役所本庁舎旧館建設当時の様子  
昭和 12 年(1937)



保存活用が図られる市役所本庁舎旧館  
令和 4 年(2022)

(イ) 一之町通り（旧名称：大町一之町）〔二本松・白河街道筋〕

『風俗帳』（文化 4 年(1807)）では、商業や手工業を営む者が多く住んでいたとされ、明治維新以降、通信、金融、官庁等が建設され、明治 5 年(1872)には若松郵便取扱所が置かれました。通り沿いには、竹藤などの歴史的建造物があります。

・竹藤（国の登録有形文化財）

『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』（公益社団法人福島県建築士会会津支部）（平成 11 年(1999)）によると、江戸時代末期の建築物で、雪障子戸、しとみ戸、帳場、土間、低い階高といった、建築当時の造りを維持しているとされます。



竹藤

(ウ) 博勞町通り (旧町名：博勞町) [二本松・白河街道筋]

文禄2年(1593)の町割りのできた町で、蒲生氏郷が博勞(馬喰：馬の仲買人)を多く住ませたことによってつけられた町名で、毎年馬市が開かれていました。滝沢峠の新道改修によって、白河街道筋の重要な街になってくると、正保元年(1644)から万治元年(1658)にかけて、越後の大名が参勤交代で城下を通過する際の宿泊所や御伝馬町も務める通りとなりました。その後、馬の需要の減少に伴い博勞は減り鍛冶を行う職人と商人の多い町に変わっていきました。

鍛冶を営む地区として防火対策を講じ、通りの南北両端に火の見櫓が建られていたことから、近年、民有地の一角に当時の火の見櫓を復活させています。

この通りは、南方に天守閣を眺望することができ、通り沿いには、神禧堂薬館などの歴史的建造物があります。

・ 神禧堂薬館

『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』(公益社団法人福島県建築士会会津支部)(平成11年(1999))によると、明治36年(1903)建造の土蔵を商店とした店蔵で、店としては会津藩政時代には藩御用達の刀の鏝を取り扱い、幕末期以降は砂糖などの日用品のほか売薬を手掛けていたとされます。

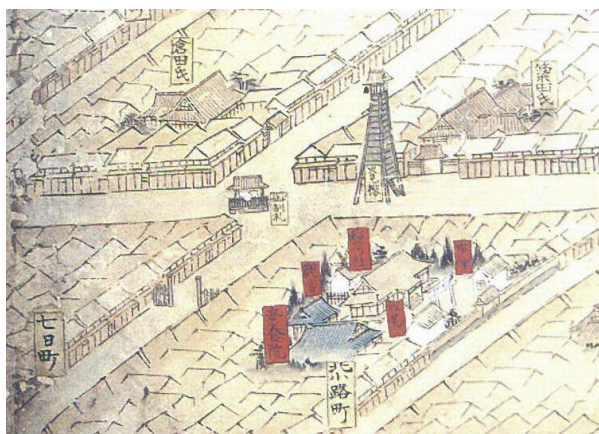


神禧堂薬館

(エ) 大町四ツ角 (会津五街道の起点)

大町一之町にある交差点であり、会津五街道の起点として諸法度の法令を記した高札を掲示する制札場があったことから、「大町御札之辻」と呼ばれました。

明治7年(1874)に建られた石造りの道路元標があります。また、付近には鈴木屋利兵衛などの歴史的建造物があります。



大町四ツ角の絵図(若松城下絵図)



道路原標

・鈴木屋利兵衛（国の登録有形文化財）

『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』（公益社団法人福島県建築士会会津支部）（平成11年（1999））によると、文化～文政年間（1804～1830）に建てられたとされる店蔵で、店の創業は安永年間（1772～1781）とされる漆器店です。会津藩政下の番付表である『若松緑高名五幅対』（嘉永5年（1852））にもその名を連ねています。



鈴木屋利兵衛

（オ）七日町通り（旧町名：七日町）〔越後街道、米沢街道筋〕

『会津風俗帳』（文化4年（1807））によると、六斎市が開催される以前、毎月七日に市がたつたので七日町とよばれたといわれており、越後街道、米沢街道に続く町として旅籠屋が多く建ち並んでいました。通り沿いには、(株)白木屋漆器店などの歴史的建造物があります。

・(株)白木屋漆器店

大正3年（1914）に竣工した土蔵造三階建の会津初の洋風店舗建築です。当時の新聞報道では「東北屈指の商館」と紹介されています。創業は慶安年間（1648～1652）とされ、享保年間（1716～1735）より漆器業が営まれ、『若松緑高名五幅対』（嘉永5年（1852））にもその名を連ねています。



(株)白木屋漆器店

（カ）桂林寺、本町通り（旧町名：桂林寺町、赤井丁、融通寺町）〔下野街道筋〕

桂林寺町、融通寺町は、それぞれ桂林寺、融通寺があったことが由来とされ、中間に位置する赤井丁は赤井因幡（蘆名盛氏の郎党）が住んでいたことが由来とされます。

融通寺は初め河東地区にありましたが、至徳元年（1384）蘆名直盛が現在の本町に移しました。その後、文禄元年（1592）蒲生氏郷により現在の大大町に移ったことで地名のみが残りました。桂林寺も現在は地名のみが残されています。桂林寺町の通り沿いには(株)満田屋などの歴史的建造物があります。

・(株)満田屋

『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』（公益社団法人福島県建築士会会津支部）（平成11年（1999））によると、天保年間（1830～1844）に建てられた土蔵のほか、明治2年（1872）、明治末期（1912頃）の土蔵が一群となっています。創業は天保5年（1835）とされる、みそ、醤油の醸造元です。



(株)満田屋



#### ④旧通り・旧街道筋沿線に残る歴史的建造物一覧

番号	郭内・郭外 旧通り・街道筋 (旧町名)	建造物名称	外観	所在地	所有者	主な特徴 (配置/外観/構造/階数/ 屋根/外壁/(その他))	建設年代	建設年代根拠
1	郭内(城内)	史跡若松城跡 天守閣		追手町	公共	平入/和/鉄筋コンクリート/5/ 入母屋・瓦/漆喰	昭和40 (1965)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
2	郭内(城内)	会津武徳殿		追手町	公共	平入/和/木/1/入母屋・瓦/ 漆喰・板	昭和9 (1934)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
3	郭内 日野町通り	宮泉銘醸(株)		東栄町	民間	平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/ 漆喰・下見板	大正8 (1919)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
4	郭内 日野町通り界隈 (本二之丁)	旧連隊兵舎の門		城前地内	公共	-/洋/レンガ	明治41 (1908)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
5	郭内 日野町通り	鶴城小レンガ塀		東栄町	公共	-/洋/レンガ	大正10~11 (1921~1922)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
6	郭内 日野町通り界隈 (五之丁)	会津若松市役所 本庁舎旧館		東栄町	公共	平入/洋/鉄筋コンクリート/3/ 陸・コンクリート/タイル	昭和12 (1937)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
7	郭内 日野町通り界隈 (五之丁)	山小商事(株)本店		栄町	民間	平入/和/木/2/入母屋・瓦/ 漆喰・下見板	昭和4 (1929)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
8	郭内 日野町通り界隈 (五之丁)	小澤蠟燭店		西栄町	民間	平入/和/木/1/切妻・金属 板/漆喰・下見板	明治期 (1868~1912)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
9	郭内 日野町通り界隈 (大町界隈)	神明神社		中町	民間	平入/和/木/1/入母屋・銅 板/板	昭和27 (1952)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
10	郭外 白河・二本松街道界隈 (大町三之町)	鈴善漆器店		中央一丁目	民間	平入/和・洋/土蔵・木/2/ 切妻・寄棟・瓦/漆喰・海鼠 壁・タイル	明治他 (1868~)他	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
11	郭外 白河・二本松街道 (大町一之町)	竹藤		中央一丁目	民間	平入/和/木/1/切妻・金属 板/漆喰・下見板	天保12 (1841)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11年(1999)
12	郭外 白河・二本松街道 (博労町)	佐治呉服店		上町	民間	平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/ 漆喰	明治35~36 (1902~1903)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
13	郭外 白河・二本松街道 (博労町)	神禧堂薬館		上町	民間	平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/ 漆喰・下見板	明治36 (1903)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
14	郭外 白河・二本松街道 (博労町)	旧松崎業種問屋 店蔵		上町	民間	平入・妻入/和/土蔵/2・ 1/切妻・瓦/漆喰・下見 板・タイル	明治5 (1872)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
15	郭外 白河・二本松街道 (博労町)	旧若松庶民金庫		相生町	民間	平入/洋/木/2/寄棟・金属 板/タイル・タイル	昭和2 (1927)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
16	郭外 白河・二本松街道 (博労町)	会州一蔵		相生町	民間	平入・妻入/和/土蔵/2/切 妻・瓦/漆喰・下見板	江戸 (1600~1868)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
17	郭外 白河・二本松街道 (大町一之町)	鈴木屋利兵衛		大町一丁目	民間	平入・妻入/和/土蔵/2/切 妻・瓦/漆喰・海鼠壁	江戸後期 (1750~1850) 頃	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
18	郭外 白河・二本松街道 (大町一之町)	旧郡山商業銀行 若松支店		大町一丁目	民間	平入/洋/鉄筋コンクリート/2/ 陸/石・タイル/地階あり	大正11 (1922)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
19	郭外 米沢街道 (大町)	山口薬局		大町一丁目	民間	平入/和/土蔵/1/切妻・瓦・ 金属板/漆喰・下見板	明治 (1868~1912)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
20	郭外 越後街道 (七日町)	滝谷建設工業(株) 会津若松店社屋		大町一丁目	民間	平入/洋/鉄筋コンクリート/2/ 陸/タイル	昭和2 (1927)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
21	郭外 越後街道 (七日町)	榎白木屋漆器店		大町一丁目	民間	平入/洋/木(土蔵)/3/寄 棟・瓦/タイル	大正3 (1914)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
22	郭外 越後街道 (七日町)	侘第二塚原呉服店		大町一丁目	民間	平入/洋/木/2/切妻・金属 板/タイル	昭和元 (1926)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)
23	郭外 下野街道 (桂林寺町)	榎満田屋		大町一丁目	民間	妻入/和/土蔵/2/切妻・瓦/ 漆喰	江戸、明治 (1600~ 1868)、 (1868~1912)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成11年(1999)

24	郭外 下野街道 (桂林寺町)	会津天宝醸造(株)		大町一丁目	民間	平入/和/木/2/切妻・瓦/ 漆喰・下見板	大正 10 (1921)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成 11 年(1999)
25	郭外 下野街道 (桂林寺町)	天満商事(株)		大町一丁目	民間	平入/和/木/1/入母屋・瓦/ 漆喰・下見板	大正 10 (1921)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成 11 年(1999)
26	郭外 下野街道 (桂林寺町)	花と陶器 永山		七日町	民間	平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/ 漆喰	大正 5 (1916)	公益社団法人福島県建築士会会津支部『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』 平成 11 年(1999)
27	郭外 下野街道 (融通寺町)	三笠園茶舗		本町	民間	平入/和/木/1/切妻/金 属板/漆喰・板	明治 37 (1904)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
28	郭外 下野街道 (融通寺町)	四国屋土蔵の連なり		本町	民間	平入・妻入/和/土蔵/2/ 切妻・瓦/漆喰・下見板	明治 11 (1878)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
29	郭内 大町通り界限 (米代一之丁)	日新館天文台跡		米代一丁目	公共	石垣	享和 3 (1718)	会津若松市指定文化財
30	郭内 大町通り界限 (米代一之丁)	山鹿素行生誕地		山鹿町	公共	石碑	大正 15 (1926)	石碑刻印
31	郭内 大町通り界限 (米代一之丁)	白露庭		追手町	公共	庭園 2,420 m <sup>2</sup>	江戸 (1600~1868)	会津若松市景観審議会 自然景観指定緑地選定部会

※表中の「郭内・郭外旧通り・街道筋(旧町名)」の色は、それぞれ白河・二本松街道は桃色、下野街道は青色、米沢上街道は緑色、越後街道は黄色としています。

### (3) 活動

#### ①会津まつり

##### (ア) 起源・歴史

昭和3年(1928)、幕末の会津藩主、松平容保の六男である松平恒雄を父にもつ松平節子(のちに勢津子と改名)姫と、昭和天皇の弟宮の秩父宮雍仁親王殿下との御婚約が、宮内省から正式に告示されました。旧会津藩主の孫娘が皇族になるという知らせは当時の逆賊の汚名を着せられた会津の人々を感激と熱狂のるつぼに巻き込みました。

会津まつりは、節子姫の婚礼に併せて、提灯祭りが行われたことが始まりといわれており、その後戊辰戦争に散った先人への「鎮魂と感謝」、また、戊辰戦争の際、逆賊の汚名を着せられた会津の人々にとって「祝いと喜び」の精神を根幹とするまつりに変わりました。

まつりの開催日は、戊辰戦争で会津藩が降伏した9月22日からの3日間とし、第二次世界大戦以前から市の一大行事として開催されており、市民にとって愛着の深い行事となりました。第二次世界大戦後になると、市観光協会が主催となり、昭和28年(1953)に第一回会津まつりが実施され、内容は「御神火リレー」、「感謝祭」、「盆踊り」、「演芸大会」、「展示会」、「大名行列」、「花火大会」、「山車まつり」があり、「大名行列」は昭和31年(1956)の第4回から「白虎行列」と名前を変えて行われました。

こうして、会津まつりは「先人への鎮魂と感謝」、「祝いと喜び」による市全体の統一祭という意味合いから出発し、やがて昭和32年(1957)の戊辰90年祭を契機として「白虎行列」を中心に、鶴ヶ城(若松城)と白虎隊の歴史に光を当てるようになりました。「白虎行列」は昭和59年(1984)の「鶴ヶ城築城600年まつり」から「歴代藩公行列」、平成15年(2003)から「会津藩公行列」と名前を変えて行われるようになりました。

現在では、旧藩主の松平家子孫をはじめ、多くの市民、県内外からゆかりの方々も参加する全市あげてのまつりとなっています。



秩父宮雍仁親王殿下と秩父宮妃勢津子殿下



昭和5年(1930)9月24日開催の会津大名行列



会津まつりの会場地図

【会津まつりの3日間のスケジュール】

1日目

時間	場所	内容
18時00分	鶴ヶ城（若松城）から神明通り	提灯行列
19時00分	神明通り	会津磐梯山踊り

2日目

時間	場所	内容
8時30分	鶴ヶ城（若松城）	先人感謝祭
9時25分	鶴ヶ城（若松城）から市内	会津藩公行列
19時00分	神明通り	会津磐梯山踊り

3日目

時間	場所	内容
9時30分	中央通り	日新館童子行列・鼓笛隊パレード

## (イ) 提灯行列

秩父宮妃勢津子殿下とそこご実家の松平家御一家の来訪を歓迎し、昭和28年(1953)7月26日に約3万人の市民が鶴ヶ城(若松城)本丸で、歓迎、奉祝会を行ったとされ、翌27日には、約1,500人の市民が、市内旧謹教小学校から宿泊先の東山温泉に建っていた「重陽閣」

(現在は名勝会津松平氏庭園御薬園へ移築)まで、手にほおずき提灯をかざしながら提灯行列を行い、御一家に歓迎の意を表しました。節子姫は、その様子を重陽閣の窓から御覧になり、何度も手を振って「私を励ますこの無数の灯を忘れませんよ」と言って祝賀の提灯の波を見つめたとされます。後に節子姫は、大正天皇の皇后と名前に同じ漢字が使われていることから勢津子妃に改名されました。勢は伊勢から、津は会津の津から付けられました。

現在提灯行列は、会津まつりの開幕を祝う行事であり、会津若松市子供会育成会連絡協議会が中心的な役割を担い、市内16地区の子供会関係者約3,000人が参加しています。午後5時30分より鶴ヶ城(若松城)本丸において開会式を行ったあと午後6時に出発し、提灯を手に市内中心部の神明通りまで練り歩きます。



提灯行列

## (ウ) 会津磐梯山踊り

会津地方の自然景観を代表する磐梯山は、古くから神々が宿る神聖な山として崇められてきました。民謡「会津磐梯山」は、会津地方の盆踊り歌として明治期につくられ、昭和初期から全国に広まりました。会津磐梯山踊りは、この民謡に合わせて数多くの市民が神明通りに特設された櫓を囲み踊るまつりで、2日間にわたり開催されます。



会津磐梯山踊り

## (エ) 先人感謝祭

先人感謝祭は、会津の先人に感謝するとともに、戊辰戦争で亡くなった会津藩士や戦火に巻き込まれた方々の慰霊と鎮魂のための式典として、歴代藩校行列の出陣式に先立ち、鶴ヶ城(若松城)本丸内において神式により執り行われています。



先人感謝祭

(オ) 会津藩公行列

会津藩公行列は鶴ヶ城（若松城）本丸で出陣式を行い北出丸より出城し、武家屋敷跡に今も残る大名庭園の白露庭のある北出丸大通り、市の中心市街地である市役所本庁舎前を通過し、江戸時代に参勤交代で実際に通過していた一之町通り、博労町通りを経て会津若松駅前付近で折り返し、会津五街道の起点である大町札ノ辻を経て七日町通り、桂林寺町通り、本町通りを通過し、日新館天文台跡等、古くからの通りや市内に点在する歴史的雰囲気醸し出す建造物等の周辺をおよそ1日掛けて練り歩き鶴ヶ城（若松城）へ戻る全長約7.9kmの行程となっています。



会津藩公行列

道中では、各時代の衣装に扮した騎乗の諸大名や参勤交代にまつわる奴隊のほか、幕末の砲術隊や薙刀隊、玄武隊・青龍隊・朱雀隊・白虎隊など、要所での演舞が行われ、会津藩ゆかりの地より招いた人物が扮する長岡藩軍事総督河井継之助や新選組隊長近藤勇など、参加者総勢500名に及ぶ行列が行われています。また、若殿、姫、白虎隊などは中学生が、中野竹子や娘子隊などは高校生が輪番で担当するなど、地元の中高生が郷土の歴史に触れる貴重な機会ともなっています。

**9月22日** 先人を偲び、会津っぽの魂が熱く燃える！  
**会津藩公行列**

※ 諸事情により参加者名、配列順序、演出内容及び演出時間等に変更が生じる場合があります。  
※ 荒天の場合、会場を鶴ヶ城体育館に移し、10:30頃から先入感謝祭、陣前式を執り行う予定です。

**配列順 (概称順)**

- 先触れ旗持ち (藤井 健一)
- 先触れ旗持ち (田中 成樹)
- 新名時代 (柳田 中幸)
- 御旗奉行 (令和色男組)
- 主 旗名 (菅原 文雄)
- 旗持ち担当 (秋田 喜代司)
- 伊達時代 (つちやん 傑)
- 主 伊達 (政宗 公)
- 津島時代 (つちやん 傑)
- 主 津島 (政宗 公)
- 日野新進風 (日野新進風)
- 主 日野 (正之 公)
- 主 日野 (正之 公)
- 冬炬 (侍)
- 上杉時代 (NTT東日本)
- 主 上杉 (義経 公)
- 主 上杉 (義経 公)
- 加藤時代 (加藤 健明)
- 主 加藤 (健明 公)
- 保科時代 (保科 正之)
- 主 保科 (正之 公)
- 二代藩主 (保科 正之)
- 主 保科 (正之 公)
- 家老 (由井 正文)
- 主 由井 (正文 公)
- 車 (中野 竹子)
- 主 中野 (竹子 公)
- 松平時代 (松平 定敬)
- 主 松平 (定敬 公)
- 新選組 (新選組)
- 主 近藤 (勇 公)
- 水戸時代 (水戸 黄門)
- 主 水戸 (黄門 公)
- 河井継之助 (河井 継之助)
- 主 河井 (継之助 公)
- 大隊長 (大隊長)
- 主 山本 (帯刀 公)
- 仙台藩 (仙台藩)
- 主 千原 (明美 公)
- 朱鳥隊 (朱鳥隊)
- 主 佐藤 (健人 公)
- 砲術隊 (砲術隊)
- 主 佐藤 (健人 公)
- 日光隊 (日光隊)
- 主 佐藤 (健人 公)
- 家老 (西野 頼母)
- 主 西野 (頼母 公)
- 家老 (由井 正文)
- 主 由井 (正文 公)
- 家老 (神保 内蔵助)
- 主 神保 (内蔵助 公)
- 藩主 (松平 定敬)
- 主 松平 (定敬 公)
- 若殿 (松平 喜徳)
- 主 松平 (喜徳 公)
- 家老 (菅野 権兵衛)
- 主 菅野 (権兵衛 公)
- 決闘隊 (決闘隊)
- 主 菅野 (権兵衛 公)
- 隊長 (朝比奈 茂吉)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 白虎隊 (白虎隊)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 会津若松市 (会津若松市)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 白虎隊 (白虎隊)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 会津若松市 (会津若松市)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 留守備家老 (留守備家老)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 二社 (二社)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 藩主 (松平 定敬)
- 主 松平 (定敬 公)
- 薙刀隊 (薙刀隊)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 隊長 (山崎 誠)
- 主 山崎 (誠 公)
- 会津新選組 (会津新選組)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 隊長 (佐藤 健志)
- 主 佐藤 (健志 公)
- おはやし車 (おはやし車)
- 主 朝比奈 (茂吉 公)
- 清掃車 (清掃車)

会津藩公行列の内容を周知するチラシ (令和元年 (2019) の事例)

## 会津藩公行列のスケジュール（令和元年（2019）の事例）

	時間	場所	内容		時間	場所	内容
1	10時00分	鶴ヶ城（若松城） 内特設ステージ	○出陣式 1. 開会宣言（会津若松市長） 2. 殺陣演舞（六真企画） 3. 白虎隊剣舞（会津若松市立一箕中学校） 4. 娘子隊演舞（福島県立葵高等学校） 4. 出陣宣言（松平家14代当主） 5. 出陣号砲（朱雀隊・青龍隊（大砲二門）） 6. 出陣雄叫び	6	12時50分	中央通り	○北側 1. 火縄銃の演武（会津鉄砲隊） 2. 「白虎隊」演舞（若松第一幼稚園） 3. 行列参加者の紹介（奉行による呼び込み） ○南側 1. 白虎隊剣舞（会津若松市立一箕中学校） 2. 火縄銃の演武（会津鉄砲隊） 3. YOSAKOI 演舞（郷人） 4. 殺陣演舞（剣技衆かむみ） 5. 行列参加者の紹介（奉行による呼び込み）
2	10時30分	北出丸大通り	1. 太鼓演奏（会津鶴ヶ城太鼓若駒会） 2. 行列参加者紹介（奉行による呼び込み）	7	13時35分	本町通り	1. 太鼓の演奏（会津鶴ヶ城太鼓若駒会） 2. 白虎隊剣舞（会津若松市立一箕中学校） 3. 行列参加者の紹介（奉行による呼び込み）
3	10時50分	神明通り	1. 火縄銃演武（会津藩鉄砲隊） 2. YOSAKOI 演舞（郷人） 3. 殺陣演舞（剣技衆かむみ） 4. 行列参加者紹介（奉行による呼び込み）	8	14時05分	竹田綜合病院 交差点周辺	1. 太鼓演奏（会津翔耀太鼓連） 2. 行列参加者の紹介（奉行による呼び込み）
4	11時20分	博労町通り	1. 太鼓演奏（会津翔耀太鼓連） 2. 行列参加者紹介（奉行による呼び込み）	9	15時00分	鶴ヶ城（若松城） 内特設ステージ	○帰陣式 1. 奴隊演舞（会津藩奴隊） 2. 感謝状贈呈 3. 閉会挨拶（会津若松市長） 4. 勝どき（会津若松市議会）
5	12時00分	七日町通り	1. 太鼓の演奏（和太鼓集団翠鼓）				

### （カ）日新館童子行列・鼓笛隊パレード

日新館童子行列は、市内の小中学校全校のなかから毎年当番校が割り当てられ、約200人の児童が武者姿に扮し、中央通りから鶴ヶ城（若松城）まで行進します。日新館童子行列を先頭に、市内の全小中学校約2,000人の鼓笛隊パレードが続き、3日間にわたり開催される会津まつりが終わりを迎えます。日新館童子行列の歴史は、当初は決められた小学校のみが参加していましたが、昭和52年（1978）から各学校が持ちまわりとなりました。鼓笛隊パレードは昭和47年（1972）から実施されています。



日新館童子行列

童子行列、鼓笛隊パレードは第一中学校で出発式を開催した後、花火を合図にスタートします。童子行列には配列順があり若武者、娘子隊に扮した児童を先頭に、鉄砲一番隊→白虎一番隊→槍一番隊→薙刀一番隊→薙刀二番隊→本陣隊→白虎二番隊→鉄砲二番隊→薙刀三番隊→薙刀四番隊と行進していきます。帰陣式では、鶴ヶ城（若松城）本丸の特設ステージ上で幼稚園児による「白虎隊」の演舞が披露され、総大将等の役柄に扮した児童が戦陣の作法「三献の儀」を行います。「ならぬことはならぬものです」の什の掟を胸に会津人の精神を引き継いだ児童達の勇ましい様子が見られます。

## ②茶会に関する活動

### (ア) 起源・歴史

利休七哲の第一人者と称された蒲生氏郷は、千利休の切腹後、利休の養子である少庵を会津にかくまい、少庵は茶室麟閣を営んだと伝えられています。

現在においても会津には茶道の文化が継承され、各流派を超えた横断的な組織である会津茶道会を中心として活動が行われています。

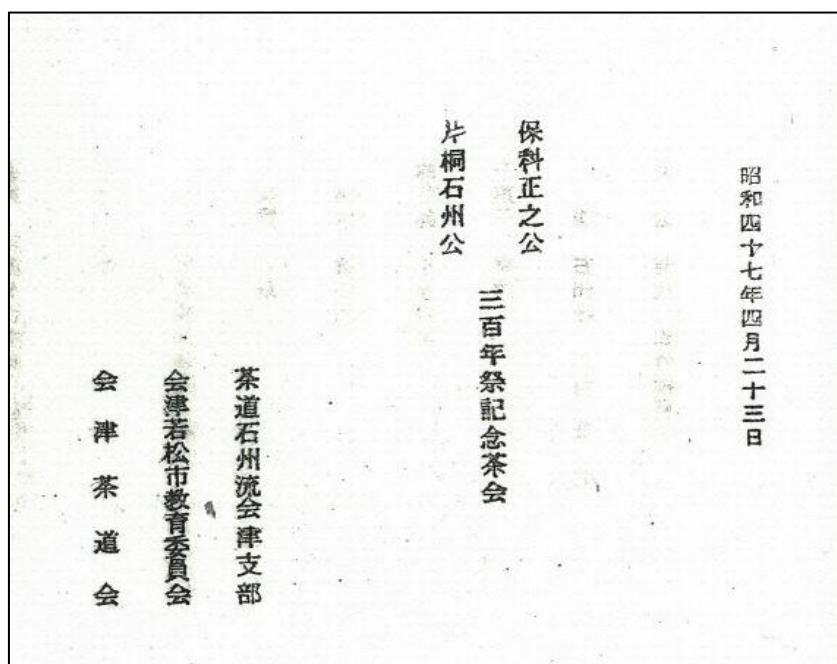
#### 【会津茶道会に所属する各流派】

- ・大日本茶道学会会津若松支部
- ・表千家同門会福島県支部会津方部
- ・石州流茶道宗家福島県支部
- ・茶道石州流宗家会津支部
- ・一般公益社団法人 茶道裏千家淡交会会津支部
- ・石州流茶道会津怡溪派（解散）

会津茶道会は、伝統ある会津の茶道文化の振興と芸術文化の向上を図ることを目的として、茶道各会4流派（大日本茶道学会、茶道石州流、表千家同門会、茶道裏千家淡交会）により昭和28年(1953)に発足しました。

その後、2流派（石州流茶道宗家、石州流茶道会津怡溪派）が加わったのち、1流派が解散し、現在では5流派による横断的な組織として、市内外の会員約320人により茶道に関する様々な取り組みが行われています。

会津藩の藩祖であった保科正之と将軍家茶道指南役であった片桐石州の没後三百年を記念する茶会が、昭和47年（1972）4月23日に開催されていたことから、会津茶道会による横断的な取り組みが、各流派を越えて長く活動が行われてきたことが伺えます。



保科正之公片桐石州公三百年記念茶会のご案内



(イ)現在の活動

現在行われている代表的な行事として、会津松平家お花まつり賛奉茶会や鶴ヶ城大茶会があります。

会津松平家お花まつり賛奉茶会は、会津松平家を顕彰する団体である会津松平家奉賛会により、毎年5月4日に史跡会津藩主松平家墓所において開催されるお花まつりに合わせて、松平家の子孫を招き、名勝会津松平氏庭園（御薬園）の御茶屋御殿において開催される茶会です。

鶴ヶ城大茶会は、毎年10月に茶室麟閣の鶴ヶ城（若松城）内への移築復元を記念して、平成2年(1990)より鶴ヶ城（若松城）本丸において開催される野点による茶会です。

これらの茶会当日は、周囲に茶の香りが漂うとともに、和服姿の会津茶道会員による活動と相まって厳かな雰囲気形成され、市民や観光客が会津における茶道文化を身近に感じることのできる貴重な機会となっています。

会津茶道会のある年の主な年間行事

開催時期	主催等	内容等	会場
4月19日	会津茶道会	花塚・水塚・茶笏塚供養 供茶、供華	飯盛山
4月23日	会津弔霊義会	戊辰殉難者春季墓前祭 供茶、供菓	阿弥陀寺
4月24日	会津茶道会	花塚・水塚・茶笏塚供養 供茶	飯盛山
4月24日	会津弔霊義会	飯盛山春の祭り 白虎隊墓前祭 供茶 供華	飯盛山
4月24日・25日	鶴ヶ城さくらまつり 大茶会実行委員会	鶴ヶ城さくらまつり大茶会 懸釜	鶴ヶ城（若松城）本丸
5月4日	会津松平家奉賛会	会津松平家お花まつり奉賛茶会 懸釜	御薬園
8月7日	蒲生氏郷公顕彰会	蒲生氏郷公まつり茶会 献茶	興徳寺
9月23日	会津まつり協会	会津まつり協賛茶会 懸釜	鶴ヶ城（若松城）東屋
9月23日	会津弔霊義会	戊辰殉難者秋季慰霊祭 供茶、供華、供菓	阿弥陀寺
10月6日・13日	生涯学習総合センター	「あいづっ子1455」茶道体験	會津稽古堂
10月17日	鶴ヶ城大茶会 実行委員会	鶴ヶ城大茶会 懸釜	鶴ヶ城（若松城）本丸
5月～11月 毎月7日	会津若松 観光ビューロー	少庵忌月釜	麟閣



鶴ヶ城大茶会チラシ

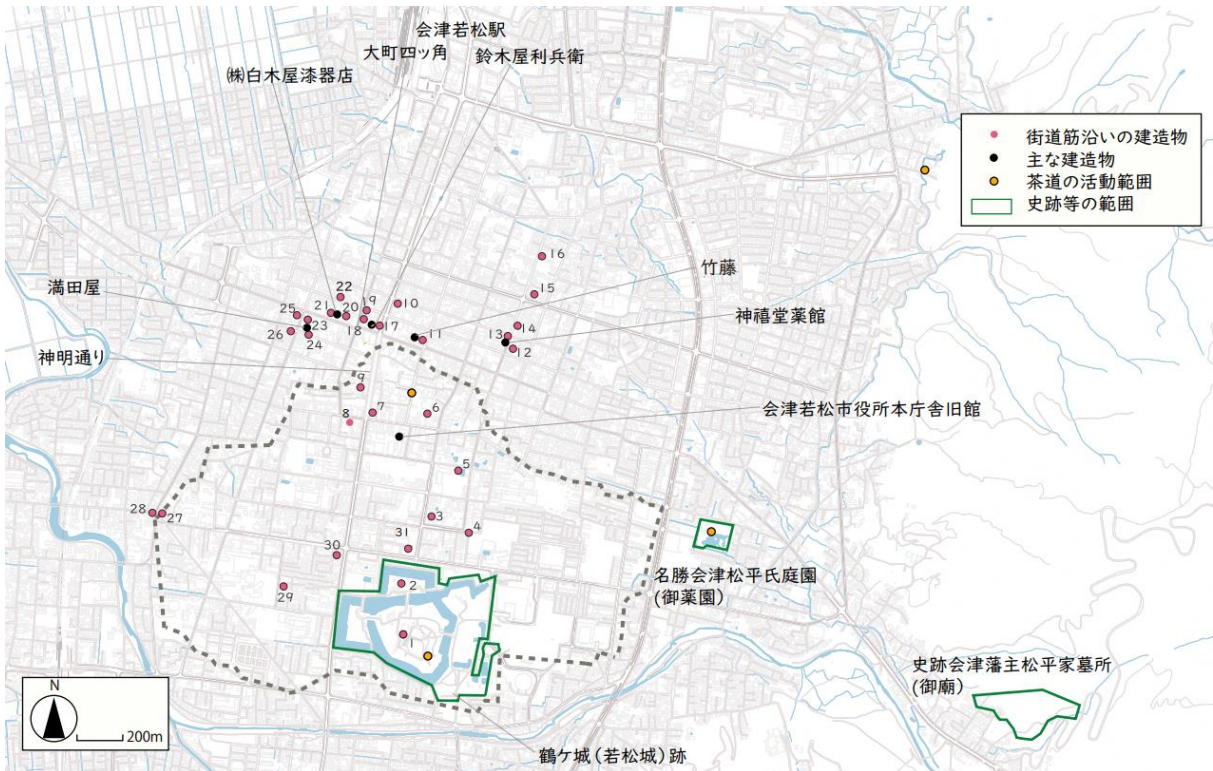
近年では、このような茶道文化を継承し、また、地域ぐるみで子供たちを健全に育成していくことを目的として、會津稽古堂や勤労青少年ホームにおいて、市内の小学生を対象とした茶道体験が行われています。



野点風景



茶道体験の様子



茶会の活動範囲

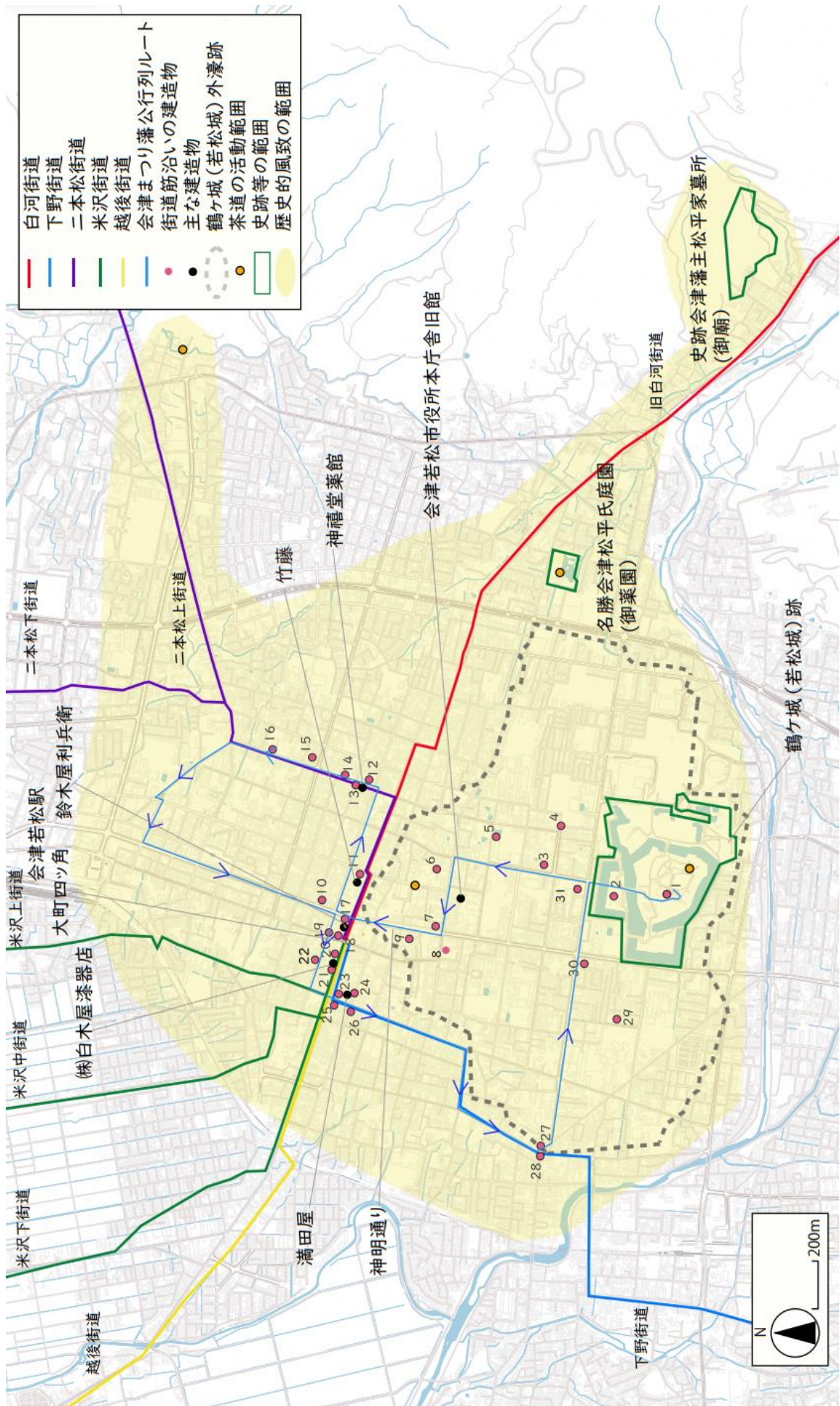
#### (4) おわりに

会津まつりは、戊辰戦争後を生きる会津人としての誇りや熱い思いから始まり、会津藩や会津の歴史を重視し、「先人への鎮魂と感謝」、そして秩父 宮雍仁親王殿下（昭和天皇の弟宮）と松平節子姫の御成婚により会津藩の復権が叶った「祝いと喜び」の精神を根幹に据えています。

鶴ヶ城（若松城）は、黒川城の時代の蘆名氏支配時から、蒲生氏の支配となった後、また戊辰戦争の戦下から現代に至るまで会津の城下町を見下ろしています。鶴ヶ城（若松城）を中心とした街なみをまつりの行列が練り歩き、江戸時代から続く街道筋に残る建造物と一体となって歴史的な風情を醸し出しています。

現在においても会津に継承されている茶道の文化は、利休七哲の第一人者と称された蒲生氏郷が、千利休の切腹後、少庵を会津にかくまい、少庵の茶室麟閣を営んだことから広がりを見せ、現在でも各流派を超えた横断的な組織である会津茶道会を中心として活動が行われています。

このように、先人への感謝と供養のため受け継がれてきた会津まつりや茶道といった活動は、鶴ヶ城（若松城）や市役所本庁舎旧館などの歴史的建造物と一体となって歴史的風致を形成しています。



歴史的風致の範囲

## 【コラム「荒城の月」と鶴ヶ城（若松城）】

「荒城の月」明治 34 年（1901）作

作詞 土井晩翠 明治 4 年-昭和 27 年（1871-1952）

作曲 瀧廉太郎 明治 12 年-明治 36 年（1879-1903）



土井晩翠による自筆の詩碑

※は旧字体による表記

春高樓の 花の宴  
 めぐる 盃 影さして  
 千代の松が枝 わけいでし  
 むかしの光 今何処※  
 秋陣營の 霜の色  
 啼きゆく雁の 数みせて  
 植うるつるぎに 照りそひし  
 昔のひかり いまいつこ  
 今荒城※の 夜半の月  
 変らぬ光 誰がためぞ  
 垣に残るは 唯かづら  
 松に歌ふは ただ嵐  
 天上影は かばらねど  
 栄枯は移る 世の姿  
 うつさんとてか 今もなほ  
 ああ荒城※の 夜半の月  
 土井晩翠

時が流れても変わることのない月の光に照らされながら、荒れ果てた城跡を見つめ、昔の様子を憶ふ姿から、いつもと変わらぬ自然の美しさと、変わりゆく人の歴史との対比をうたった曲です。この歌は「THE MOON OVER THE RUINED CASTLE」として英訳され、海外でも認知されています。

宮城県仙台市出身の土井晩翠がこの詩想を得た由来について、鶴ヶ城（若松城）跡にある「荒城の月」詩碑の裏面に晩翠の自筆で刻まれており、第二高等学校（現在の東北大学）生徒時代に鶴ヶ城（若松城）を訪れ、脳裏に深く印象が残り、その後、鶴ヶ城（若松城）と仙台の青葉城を詩材として成った、としています。

このように「荒城の月」は、仙台藩青葉城址（宮城県）、盛岡藩九戸城址（岩手県）、岡藩岡城址（大分県）、前田藩神保氏富山城址（富山県）、加賀藩石堂山城址及び七尾城址（石川県）等と共に作品のモチーフとなっていると言われ、鶴ヶ城（若松城）を案内するボランティアガイド等により歌い継がれるなど、会津若松市民にとって特別な歌となっています。